



## 東京赤坂ロータリークラブ

NO. 1179 / 2014. 01. 24

例 会/ANA インターコンチネンタルホテル東京

Tel 03-3505-1111

事務局/〒107-0052 東京都港区赤坂 2-19-8

赤坂 2 丁目アネックス 3F

Tel 03-3505-5976

Fax 03-3505-6004

http://www.akasakarotary.com/

### 東京赤坂ロータリークラブ週報 Weekly Report

2013～2014 年度クラブテーマ  
会長 西澤 民夫

「みんなで参加、心地よいチャレンジを！」  
Join Together with Good Challenge!

●本日の例会/ 2014 年 1 月 24 日 第 1287 回  
第 4 回クラブ協議会 13:10 ～ 14:30  
「各委員会上半期活動報告、下半期活動計画」

●前回報告/2014 年 1 月 17 日 第 1286 回例会

卓話:「漢字の成り立ちとその文化的背景」

社団法人 日台友好交流会

事務局超 兪 明鶴 氏



卓話紹介者: 西澤会長

### プログラム委員会: (高須副委員長)

2 月 20 日 (木) レディースデイのご案内  
18:30～国際文化会館にて夜間例会レディース  
デイを開催。泉晶子氏によるピアノ演奏と、ご主人  
のテノール歌手久住庄一郎氏による演奏会です。  
会費は会員 5,000 円、ご家族 8,000 円です。  
出欠表は、例会受付にありますのでよろしくお願い  
申し上げます。

### 幹事報告:

- ① 1 月 24 日 (金) はクラブ協議会です。各委員会委員長は、上期クラブ活動報告書、下期クラブ活動計画書のご提出をお願いいたします。
- ② シドニー国際大会日本人朝食会が 6 月 1 日 (日) AM6:40～開催されます。会費 5,000 円。締め切りは 4 月 21 日です。国際大会へご参加の方は、ご検討ください。
- ③ 次週 1 月 24 日 (金) 例会会場は 37F「アリエス」です。

### 慶事披露

100%出席

入沢 頼二 君 (27 年)



## 親睦だより (NO.5)

### <火曜会>

皆様あけましておめでとうございます。新年第一回の火曜会は 1 月 14 日に行いました。参加メンバーは、大日方・橋本・尾関・小原・石井(達)・高須・小林の会員 7 名でした。

新春らしく、クラブライフの基礎となる「例会」のありよう、我がクラブ独特の「火曜会」について活発に意見交換がされました。

① 「例会」については、特に入会間もない会員が慣れることが出席率の向上に大事なことで、S A A の発起によるテーブルマスター制度 (おもてなし) を大いに活用していこう。

② 「火曜会」については、いろいろな意見もある中で、まずは原点に戻り、電話による事前の参加要請を繰り返すことから始める。

以上がたどりついたところであります。皆様、今年も「親睦だより」をよろしくお願い申し上げます。



1 月 17 日 (金) / 7 件 15,000 円

累計 738,000 円

### 多額の寄付を有難うございました。(敬称略)

西澤民夫/盧さん、秦さん、磯部さん、大歓迎です。石井さんご苦労さまです。田村昭二/毎日厳しい寒さの連続ですが…「冬来たりなば春遠からじ」。高須康有/遅くなりましたが、新年おめでとうございます。本年もよろしくお願いいたします。村山公士/大変遅くなりましたが、明けましておめでとうございます。今年もよろしくお願いいたします。入沢頼二/明けましておめでとうございます。27 回皆勤のお祝いありがとうございます。小林博茂/親睦旅行 4/12、13 です。皆さん帰りに〇印をしてください。石井達/兪様卓話楽しみです。

出席報告: 会員 36 名/出席 21 名 欠席 15 名

ゲスト: 兪明鶴 (卓話)、金子花、藤島シュミ、  
盧榮錫、磯部純一、秦一成

ビジター: 菅野谷純正 (東京大森 RC)

計 7 名 (順不同・敬称略)

●次回予告/ 2014 年 1 月 31 日 第 1288 例会

卓話: NPO 法人かもものはしプロジェクト

村田 早耶子 氏

# 「私は一人の女の子」マララさんの思い

## 美しく汚れなき理想郷、タリバーンの支配下へ

ここは、パキスタン北部、カシミール地方とカイバル峠の間にあるスワート渓谷。かつては、行政長官ミアングル・アブドゥル・ハック・ジェハンゼブの管理下に置かれ、豊かさと平和に満ちた生活が営まれていました。ジェハンゼブは近代化を進め、男女両方に開かれた学校を建設、自動車では行くことができない遠隔地にも行政の手を行き届けました。「雲を突き抜けるように山がそびえる、美しく汚れなき理想郷。人びとは、この地をシャングリラ（伝説の理想郷）と呼びました」そう振り返るのは、ジェハンゼブの孫娘であるゼブ・ジラニさんで。地元の人びとから、今でも“プリンセス・ゼブ”と呼ばれます。小さい頃に緑色に輝く石で遊んだ思い出を偲ぶジラニさん、かつては家族が所有する鉱山でエメラルドが採れたそうです。

しかし、1969年、スワート地方の主権はパキスタン政府に渡り、同地方は下降線をたどることになります。さらに、2008年にはタリバーン政権が台頭し、その後の2年間、人びとは厳格なイスラム法によって支配される生活を強いられました。政治的に敵とみなされた者は拘束され、斬首刑や鞭打ちの刑に処された人もいました。公開処刑が行われ、女性への暴力が横行し、学校も破壊されました。ジラニさんは1979年、生活の場を米国へと移しました。その後も年に1度帰国していますが、生まれ故郷が侵略される様を目にするのはとても辛いと話します。エメラルド鉱山から得た財産もなくなってしまいました。しかし彼女は、一から集めたお金で学校を建設し、スワートからの難民のためにシェルターと薬品を提供、さらに、スワート地方に初のロータリークラブを創設しました。

## 教育への思い

クラブへの入会を呼びかけた最初の人たちの中に、教育者で活動家でもあるジアウディン・ユスフザイさんという人がいました。彼の娘は、今や世界の人となった、マララ・ユスフザイさんです。15歳のとき、既に優等生として一目置かれる存在だったマララさん。青い制服を着て、科学、数学、イスラム教育、英語、ウルドゥ語の授業を受ける一方で、パシュトゥ語の詩から冒険物語にいたる幅広い書物を読んでいた。ウルドゥ語で書かれた彼女のブログには、パキスタン軍とタリバーンの争いや、上空で大きな音をあげる武装ヘリコプターなど、タリバーンの影響下に置かれた生活に関する記述がありました。また、不足する書物、自分の夢、お気に入りのピンクの服、そして教育を受けられない日がある可能性などについて、彼女の思いが刻々と綴られていました。ある日のブログには、次のようなメッセージが書かれています。「タリバーンが、女子の学校教育を禁止する法令を出しました」「私は教育を受けます。私たちは全世界にお願いします。私たちの学校を、スワートの地を守ってください」ブログでは、グル・マカイというパキスタン民謡の英雄の名を使用し、本名を名乗ることはできませんでした。マララさんの父親も、スワートの伝統を守ることに力を入れていました。パキスタン政府が同地域での統制を部分的に取り戻した後の2010年、彼が所属するミンゴラ・スワート・ロータリークラブ主催の音楽イベントの準備に加わっていました。タリバーンの台頭後では初めての音楽行事だったため、ロータリアンは皆、イベントの開催を強く誇りに感じていました。「まだタリバーンの影響下にあったので、開催に

は大きな勇気が必要とされた」と、彼は振り返ります「脅しや暗殺が頻繁に起きていたため、何が起こるか分かりませんでした。でも、結果的に素晴らしいイベントにすることができました」

## マララさんを襲った悲劇

2012年10月のある日、ジアウディン・ユスフザイさんは、総勢300名以上の校長・教師が集まった全人教育の推進キャンペーンに参加していました。ロータリー仲間のアーマドさんに続いて演壇に上がったとき、一本の電話が入りました。「私はアーマドさんに電話を取ってもらいました。すると彼が私の耳元で、娘が通う学校のバスが襲撃されたことを告げました。目の前が真っ暗になりました。マララが標的とされたにちがいないと感じたからです。場内には私を呼ぶアナウンスが流れ、額には汗が流れていました。6分間の演説を終えるとアーマドさんがやってきて、病院に直行するよう私に言ったのです」被害者は、マララさんでした。スクールバスで帰宅中、銃をもった男が車中に押し入り、どの生徒がマララさんかを教えないと全員を殺すと脅したのです。恐怖に駆られた生徒たちは、マララさんの方を見つめるほかありませんでした。男は銃口をマララさんの頭に向け、至近距離から発砲しました。事件から6日後、戦争被害者の治療を専門とする英国バーミンガムの病院に搬送されたマララさんは、そこで昏睡状態から目覚めました。

「どこの国に私はいるのですか？」とマララさんは尋ねたそうです。謙虚に振る舞いつつ、彼女は毅然として述べました。「タリバーンは私を殺そうと思ったことでしょう。でも、そうはさせません」父親には「安心して」と声をかけ、ジラニさんには「人びとを助けようとする私のことを、きっと神様が守ってくれる」と述べました。

## 希望を新たに

2013年3月、マララさんは、英国で2番目のパキスタン人口を抱えるバーミンガム市内の学校に通学し始めました。グリーンのセーターに身を包み、ピンクのカバンを背負ったマララさんは、頭の中に埋め込まれたチタン製プレートと、補聴器材が左耳に付いていることを除けば、普通の女の子と何ら変わりはありません。「私は一人の女の子に過ぎない」と彼女は言います。英国での勉強を開始したマララさんは、最初に、すべての子どもの教育を受ける権利を訴える署名活動を行いました。父親は、ゴードン・ブラウン国連世界教育特使（元英国首相）の諮問役となりました。マララさんは、世界中の人が知る存在となりましたが、心の中には常に、故郷に再び繁栄の日が訪れることへの希望が宿っています。ジラニさんは、スワート地方への物資提供を通じて、地道な支援活動を続けています。「マララさんに起こったことは本当に恐ろしいことです。しかし、これによって世界が彼女に耳を傾けることになりました。きっと、彼女の目標を支える大きな力となるでしょう。いつの日か故郷へと戻り、私たちの活動が生み出した変化を知ってもらえたらいいなと感じています」故郷に変化をもたらすこと、これはマララさんにとっても同じ願いです。彼女の父親は、今回の事件を振り返りながら、いつか故郷に帰ることを望んでいます。「私たちの故郷、スワート渓谷に帰る日のことを夢見ています。そしたら、マララにもロータリーに参加してもらいます」 **記事: Kevin Cook**

本稿は「ザ・ロータリアン」誌 2014年1月号からの抜粋です。

(RI HPより <https://www.rotary.org/ja/malala-one-us>)